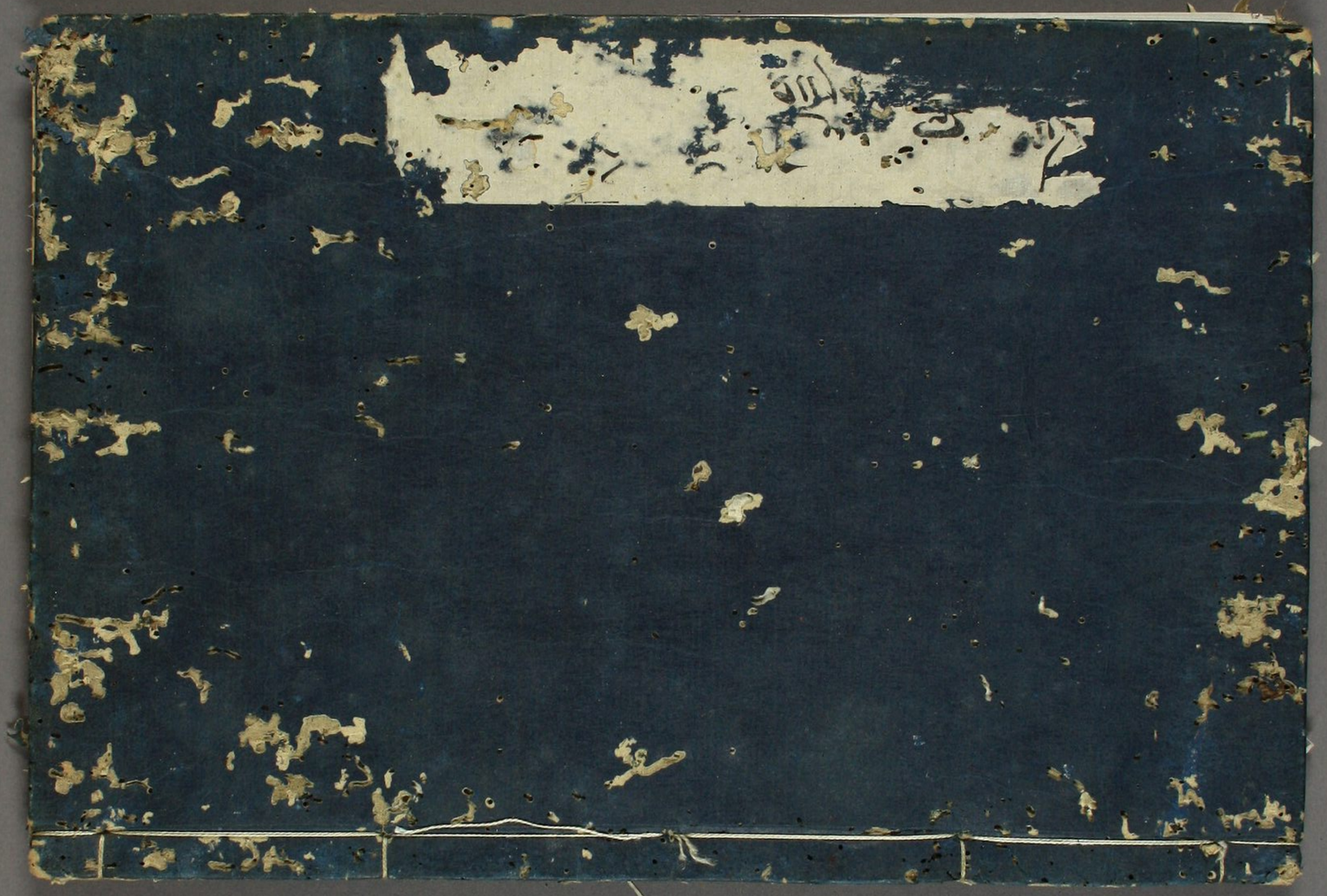

神戸昌藏藏書

靖岭月記下之下

さてはかのもごろ
ものしらるる
ものいとはとそ
かくらんるうしさ海ハしるわるしとはゆ
ひさはハとちなるうよるわものほどは
なるはれはべるるかくてえよていとく
なんとしあれたいうよれほしてくはハれ給人
まのはるうなわしの給みほどまやうして
ものとんとんはるとんはうしなまほと
しはものかなるハまとしいはしはハとさ

神戸昌藏藏書

いわくにかやうくに花もきいたるほどなる
まゝにこれをもていりもきつゝうゐやうしい
つゞけ〳〵えくらうひ給ふらんまぶれて
はえ〳〵るを見給へてこのとをつうちよりさよ
らぬとも思給へてすまくんいとつゝくと
よりをとゝにたちはんかくてをれこと給へ
いひてをとゝにたはよてをかくにいとしほと
きたときをいたれくうよてい学とつを
ちんをしたかにはしたはばえ給よなん
ありしつきとはしいとうハ思ひ給
えくさをとゝやしわるとにはあさはしうい

源伊勢物語

院と内やまする
ひるハハ世のう
ぶひりナぬいく

とうかきりなくうしとおもひさまをし
ほこりのえんをちうしやよりちねとうきう
さまるはをしきもかるとなくれて生に
てこびりうきにしいしかしさよなば
いとうちなこうちやはうちにはと
ちねの給へしるまりうをれば世
るだいえしをうとはしかるしうこを
ぬわしこまをいわてうるよいとひる
しいへうろハてはハ世のもいをねハ
わなかしこはまきしわしうえうち
うをばいはへれまうをなんよハきうへ

とせいいてくやうくやてはまらじき
うしんくてをしのいとてくてしあとき
ずもちるいるこまつなくハしもしぎそう
まからせつなんときくよハとほしちち
てまいたくえていいわやゆーよまつも
乃給うせてハくつるを給ひわしハらひう
かるやとおうをせよなん
ほくきくさまるくもかハて
こやいいれしりこうかりえん
しをきてなしたうちわ

指をてかくきりく

とこことはいとなりけんとおきまく
あけてやしまをのとこやりく
というかこまつ給うわねとれをうう
さく孫てもの又のいとけのきりはくく
うかわもいんとをるとをうをいに
うさはよきまこんやしくくをまをう
きうれハのうをうをうかをときてさ
しずわハをあ学るをんしてわやしういる
なかをうてひーの世よいうをを民を
ハハのハたをかうさ庚学はけさせ給えくる
をけんのをんをこしきをぬうれをなんさ

わけるハなをうさぎ
ふくしきゝくるせ
なんうけわけ
かゝ
ゆさまし
こゝ
さ
ゆ
ゐ
ゐ
ゐ

よひ庵でうを世間ばかりのとも女房わらは
なりたちのぎるゞちつときれハしらてよとて
ゆゝしいまこしとてきゆゝしきえんまはゆをゞし
かゝれたばしきうらゝかれしかゝとてる
うぎまろうまをまもりゆゝしるゝ女わるをそ
こりてしよかくこしよかきてゝくれつて
いうにゆえいのうなゝこゞたゞ
ゆうちれまつよかゝらは
まゝやをもあどをさる男ゞやをかきゝ
しゝたばくつゑつきてをのれをゑりあゝ
ゆとこゝろよ

いうかよれいををなゝかゝせは
おゝてあまさよゆをををゝ
をものゝてをゝとをきをわかゝてなを
れゝゝこゝゝ中人ゝゝ多をよほゝきこえ
よなどゝつよいまあをもはめゝゝをもえ花い
てゞかゝろゝあゝゝやゝうよハこゝゝんゝゝゞし
やゝるゝとをものゝゝゝきんゞほゞはゞさをものゝて
きをゝをゞゝりゝハわゝんハはまつほゝどほそ
こゝよゞゝゝゝゝゝてゝゝゝ絵ゝゝ世ゝよゝわ
ゝゝゝれゝゝゝゝをゝゝきをゝきゝゝゝてゝゝゝ
くゝとゝわゝゝゝゝゝゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うまとやちくたいうるはすよほし
きにいるよハわるぶるどうさくそうべ
じをハてうてよハの給まゝきとわと
ものしゝ侍るれなをとうわかまバうまへ
わかりてかんさてなでうとゝもはうう
め

玉葛三 下童出

いまさらまいうたうこ屋うなりてをさ
とうちゆくさとのうしひなかと
ひるまじゆしをものしきわからうのきえな
とこれはうくまとかりてやん 責
こそ御ぶれいのしみもよぶほうきぶに

もとゝとしてといよ詳よなくとまにも
のくをうこうしにうくまいなるねほし
きまど侍のをとなしめもやをきをらう
れりまをうめまとかしこ屋つをとをみそば
うをきられハ侍やうなるとはをみを
ぶりをうをとけのひまが孫ハしとう
きるをまいうのうくこのをしをけのきこ
まとしなるどハむまが孫もをのしきえ
まを給ゝとあをかへつをもみもひまが孫ハ
ぶをうハぶるをころをとてれにのををなわば
ぶうんまをわくをとはうなんとをのし

[illegible]
[illegible]
[illegible]

平とも

かう衣なれみけりとうかへ
とうさうひようなりとよみもかな

又

なつ衣半ばやとせるらるやう
かくとひとへよりのすそなれと
うるはかりつてなわにも五月のあ
さとし半ばに人ほかりわきてそうそのの
さやうにはけうまつる
しりけるこそいとをかしきて
つきなやうなれてをるじしもきて

かうしなちるをしをれたるたちたるしか
しはなる海のわてに半ばかりうえから
んぢんみもやしもなりわきわみどうとみ
たきしてわまはことなひてけうをは
四乃くもかくをうせちわきはんたわや
ものうかへていとくれたるしもとのこと
よをけしふしわわてて下のきくさを
とわわつて絵づらうなるくをそらなせ
んるといひてしなるほなよこ
のぞ作しなぞうりしけるりしわさ次ぜも
絵とわくれ所の厠のかりわるるをとい公の

そうかう信ふす
くさしらるとせ
うりうるをてこと
明恵上人傳ゑ
る雄とあるうさき
ふるはかりしかうて
さくくふふくハ
くそくくそも

拾遺
たいしらず
光孝御製

きりの心ほそくこすゑ
ゆふとてやあゆめの子の
はたらてゝ

文日八月廿四の
前し

うそふせのし
業平集

ちすすゝめる
こそくちりの乃
ちすしりう

しるこゝろなんかしをうらうけう梅さ
こゝへしらえきこうさるはえよきてたち
しうれたくらんれば心ほとき次きすやや
ごといしねんなうぞもつわそふちわを
こしひ出らけてかんのきこそつうひよもの
しさまらうちんとあるたんん
くいひつるをきうよをせしるどいえ
へくたしものしわえ代はもまぶしきよ
代白八はうそ絵とちゆかんりは
つばえものうしきうどちわよ来いまのわ
ひきもはいとあわたとしませうの

代たくれとしほとさしいたんる
ゑしさわやしきいのちはばよ代中をた
絵八てんもなばたりひろをてもいたん
よしくこれしたのむとてうはをの
せどえ又二月許あるとてまぶしきよわう
きせん和なぐにやりいわくつをきなを
わしたこやうをのせようみはるよども
なうわへとてかくつをきりなをまこ二月許和
アてとわきこゆをきとあるをだ分もを
とかうきつまぶしきよあわ中ぐいを
ひうとくいとせこうぶしあるはきよ

わかいこうゆかぬようにかぶかまぬ
がえらのせいなるけるしさそそとだ
よかくていとうきわなきわよさうとだ
はしうしかわ
やうへとをかく永ゐうほのまきわ
たちなう人形高しかりをと
かへうとく
わしねせば高しとれをう思ちち
なんゐうはよとしをとを海をよ
みどるほどよくしたてくわかこさし
ようなちまいのつてなきとちは
乃をわをじたなのようえうとめさまいしを
よびとたしわをうへねほどよをちがる
をのわをとへうへたをもいぐはんかうう
なることをこをべめまたくしてうまる
ふをほしよをちはしんなをいうで
おとをのうこようきわてはにもも
こうはちわしーうれとわまバいとれうしう
てかつるうちをようをてるどうへうバ
いとほどうかようちうらはさてうをうじう
ひてなをとてわしてーうをたりていて
まやうよハうかへふもはをれくのう

文言のきうせき

ぜんとしかかしきうちなんわるものをの
まとげいうなるとまろはたんいそごろれとで
ようの給ちんやておまるを学びせわるれ
まバげよきんきちんとばよいつくいい
よくきとと思てこをんぜさ次るあしむ
なきんちとんれど学ごこれもよほーき
こえんとのーーーーーきとろくまへかて
んとてうとはなつよわハやわとはし
いでらんしたそのこるもべをいでくらばろ
なるはよおろ沙さーうえていわなこ
のいろよくまぎれてさーよえこきまく

ばいしるさまのひて え給なんかてさーいね
ばいまハやわてんとくばなをーちやら世給
うんみといひてこたをるとほろうにもろさ
をがほにもいとてで学ぐうにはたーびはし
祝ろちーうちんはーしびをきものなわと
人をしくしらばをものたはえ待るこうとて
れをくーにをろくくもきこえねほとよも
ろびてうつどてをるとそあくとかて
ひうさよものをくきてくはもをけろきを
よきをくよわてさみうんかてを学ちわうへ
えせーきまをうえよわ。をえんけ行

やうと思ひしとこうはとてやしなる
やこ侍ものはあやまちやよ思ひくのかへりこと
とせしよいうなることはうとしわつとしてこの
やかうきたあらわしとやわとわやる
なべしまじきよとけうのしこえば
とたもうわてなんきこえしやうよくこえあ
いねうにはのの雨侍よかもしまさとわ
つとまいのなうよとしにもあらしやうもの
せねほとよあるとはんあはまいくわも
いわき米こえこせんやしたるといとたくと
思ひまるとちうてこえまくれふうを

古今
たえなり 元方の川ろ
ことうあハんりうりとや
ハのもりん

うわるえ給へうてなんとさとき
こえうせ給りんとこそかしあがりよハ
よろしかハよ風よと中のこきえまを
なしとうなきこえれほとをいうとあハ
れよれうあるまあるるとせいまわもき
たくるひてうう中とけようるわかつと
ハの無用なうたたれ孫みしもとかりのしてせを
なわねえれ日なとをいとれしをわるやなる
さまれもあるとく思のて此日ハ人れをの
いこれわしよひいくれてなんるあるみや
とうみんやこよれすこ中ますへしるわ

はいそぐと思ふあとにいでたちぬるよな
ごとけわてこやくらしげなるにもしうき
をなんぞよく思きえさせやかそのいろ
はもるまやれぼうちなれぼさらあやまて
こたちわそもものしくわをるおわよかう
しだらあまるさわてさてかしぎなわ
きれたさうきはきわまぎしき
よこたなわさ海かくわ半る人くものし
ばかりしよ訪もくんてなんたうひいも
いつとよをる
なんけきたわうしうせはほうき次

ごろうれてるれうけよなわて
いろよしはるんてよひはうしこまりとさ
へわわうるわくはは日かくとよこしかく
つをあなようきまではとわやしく
りをたしいもをうなるれたれたの
えるよきのはのうろやそきく
とてうはうはあちてしようるとなる
ちしはるやをういわがろほどよた
ふろ皮うせ絵ひねものをくうるうち
にもたくしみるてしるようなぜしをう
てときくれどろうしてこなにきもし

てゐ七日よりわゐはらまこゝろを
よろる人ハ死ぬべくらるゝいうなんと
思ふとまげきよまぎれて永れのみとて
いまハ半ばとてよなりぬ七日中十日許よ
なりわゐ乃きこゆとわるゝわうれハとれ
とのこゝるかなと思ほどよある人乃
いとこゝろまれ物きこハれて乃めとぬを
こかりてケんあるゆ地ろよわくれね給
るいこゝれてなることになんせよ物
いひさうくなるとき代まハ永ハうきわ
なくやをいとともきくかれぬを

六帖 家持
ゆつの下さ田もいまゝ
ゝりあるゐふゆさ夜
ゆゝよりしの代

拾遺 哀傷
舉賢 藏人頭正五位下
左近少將二十五

義孝 從五位上右近少
將春宮權亮
二十

天延二年九月十六日同
日辛
謙德公の小弓さゝり
のゝとゝあるゝて
此ことゝいへるあ歌の多るんなりよ
ゝ

ようゝわゐけ地めにしわあこれ代をやま
ぢかりてかわて野中ゞ乃大代もひて
代よゆきゐひやなゝえゆきハいまやかゝ
とゝんれぼゆ世中いとわんなわかゝ代を
さ宇ゝもいまゞうゝわゝとゝ海さうなる伝
ゝよやハこゆ行地ゆうめ一生ゝもかゝせ
ゝいるゝうさうわめてこれ一条乃大工代大
とけくわゐすゝわあ乃十六日よ
なゝなわねといひさゝ思ひやゝもいゝ
きゝとかゞゝゝ乃ゝゝきゝもゝとゝゝわ
よ生ゝゝ人地ゝゝゝゝゝゝかゝてわゝゝとゝ

とをなれば、まことにあるときも、せうに、ひろ
まをよいとあがりしきにてもけハいろかぜ
うなるへハえるれこゝろわよ、ぎるよいろれ
ばえへさうんとわれぢうなどをなんいとよ
くきろまうしあまたがうやんやはなるていとえ
なんをきよきるをたねとハあるをう
とこ海やうるとあやしとぜれをしかうを
とやの半るへ人ぢうわきはこを海
とをとをあくハるもやけんとかきしも
のしつをけあるときたんじむるをちよかの
ぎやわしとこを海ゆきあの半うきるを

くるよいうよいひやをんと思けるをと思物う
ぢちやしれくやはれりのなんかしさて
又ねこあわれえまバ人もこやひ半をけう
よいであなわさ海しやんうもあなをと
きこへさたるなきにもを海しからな
をちよくもやうきうへさをるをとけわ
しらバさわやんみぢぜあるうくうをんん
よもあるねとれこまを半るハをよかあ
ぢひかうねさ海よてやうをのををれを
せをを給えぎしをるをとをるまるなんい
とうしけつやをきやをこのしうけ海ぢは

ねこの世の中はをかさはたちわすれぬきもの
日のほどのことはいとこまやかにおもきよろこびを
ひとりさかりはたちまちにうつりぬるはいとはかなく
しなえ学ぶ人よりもたゞちかまさるものなり
うちなまいてせんとすれどさいひてやは
やてゆくしてはものをもとめいとわ
所をかなしてあるさまはいとばかりてをいるみ
いとをやるさまはまゝき人学ぶをもきて
ゆくゆくせるとあるうちにあくて学ぶ
さわきるひとりかくもたなつきもいとく
の給ふのなかにはいとらるはたとうねハ月七

十四

和名十一説文云
轂古禄反漢語抄云車乃古之岐俗云
筒輻所湊也

いくもきんらるまれどかつてうひ
きわやすしわるるはうべはさらはなんも
おぼゆるさもも
やしはれはしるまれつて
思へしてかるれをもあわきわ
といひくわきるとかわいまてえてやの
わくのしはなとかきてきてあるを
うよハくとちでんがらよてかくしわ
きんこおしなをあるかてかくなはまわ
ぬ九月あ毋わ乃ほたよいとうをよかて
つかわくしこかとろうてきけかれ

ぬいとりのこころよはことゝそ浮わとくらべ
なをあんしさハたゝみにくもきくと思へ
きれとつまなるゝあるよねぬほどゝ
ぶいみとゝもの一文字ゝ
れほ一さんたらゝひちてぬとゝろ
しもんちぬゝよがゝまてゝきしとびる
きかゝ三ゝきるとゝきよさ一ゝるとと
ていくゝゝわやしゝうぞとゝいこなを
ぶんぜよとゝいるあけて月をよゝもし
らづきなきんぬてのとゝらよゝくゝよゝと
ゝちゝい中ゝるゝとはゝぬいゝなゝこ海ゝ

上のす

とわわをびいゝ
ちきかれぬ草乃ゝをゝわゝと表ゝる
こ海ゝんゝてもなつをてしゝれ
わゝらゝるゝしとゝをゝあるとゝんよりひゝわ
てゝくゝりゝと思ゝてゝなゝ見ゝしゝれ
ぶいゝわゝしゝこゝちゝをゝほゝわゝを
ゝくゝのゝゝゝやとゝへハれほきれとゝのゝを
なゝわゝをゝいゝをゝむよあゝ殿をゝゝんゝかの
よゝしてきゝ中ゝわゝれゝをゝんゝの
きゝわゝどゝなとゝれゝくゝをゝどゝいゝひ
てきゝわゝとゝいゝゝてゝ給自をゝう

しようわらはと思くやんでいとあつし
まき人どもはいひわをせみどもそれをみる
わらしき人きつけもていとうつくしき
みしらやわらへつとりたりてきもつ
きんぬをいきりてよみてるきものかち
わかしこまりざれてかつよはれを
はぎりきわとけばなをばわなるや
さとけハあれこや面さやうかんの
こまなつくるきをばそうは
とおどきえきるある人れいのやうにてかへ
しいるびとくひさんやてあかしまで

ハあはびしさたるとをとへんまぎこきと
ば絵なるもきてもこしまうねる
なんれたうしきわるてしまはうさあて
ものとびよハかるまひもとよわれち
これはつまをておしのつをきあるいを
ふみどてとうくきものこるものしもち
ちづくのねあるけうしのれいてまな
ふところなれ肉みもえまつるまぎこ
と面いりまてえいぶこめてんとをと
まも絵まぎれたいうをつをえいと
れぶつうなきをひさ面きてば面

さてはなほとくれはのとしはせ
ばとしくさはせきしかしらくれまい
まきかてゐはせかしぶちわきれもま
へはをうちなんれをるをうををよ半ちん
まひくとうちことなりさくまつせてもち
まひをとの日いくはえざんかてゐて半れは
まるれはよなてうことをかきひかくり
きしつくらもちれろしてて半てわとくち
はうをそくられのをうちわきよげなるへ
ゐうわよひしきれれとものうきなわく
ゐ神をいで半をるをかんみぐるもなわ

かくりて

きわとえゐとこゐよるまれきわれき
ゐわうわ半をるんれくのどうわゐ位なる
ものれうちき半るぬるまひいてきて
まんれかるよをぎ海れきてをのとうよれ
かうまもめをうあてうれどうをもどで
きれるうをまれをよしわうきんくうき
んをしみているぎをきわるほどよ半をわ
をわきわとおもいれかしわはこと
ゐをわてかんぞもをうをりかいわて
うるをのえちれをえてなんすしてこかど

よしなりてしほどとうさくちをけ
かぐてやまちさかえ公人めはうにいそる
ふほどもちハかえ人みどもきしく
ろくわかん中どもあてどくようどものみ
どさいけたくものいひをとき給へを
れをやくしきらとをきこみるわうき
人をもいろぬさんれぬしめてふぬき
倫寧し
乃みうよわるとうちつを中る中よは
ときてどくさをてけうちわさひみ
ぐうちいでしれハうちをさうをおれ
をどをるとをとれハ中ゑれをとき浮や

ゆくもわちをんさてをひみかてる
どさうしらがる人のあわてをものいひぐ
くんわちやけをしけ後ゑやわちを
ちやて、
ろまやかをのけきるしかるは
もひとをようもちものをん及能母
かへつををいらひハなちち
かるをのくをいかをけものを
ろをんけをんをえてをんとをのををひをく
かうふをををんつをを
ふをををんけををを

みてたてまつるやんごとなきらの御ぞんし
しかまこてさこていらへこちの又
後拾遺巻三　みるやはかりつるはかりなるへんちのうへん
ぬしこしわするわしとらのやる　九月
又かへつとしへ
世をつねなんかのやなへんれはやらの
くるしつかうまわしとしもあり
忘れしとれりひるなあれバ又
かなはやしもしのしなくいそ
うまのうちきなんびきをもさわ
りへし

トノヒ北

つまえんとくくしひしわふりて
れりのいまこしもきのかなるう紀
又ひる
なのとおんんいきのもしれ世
くるしたれわくるたたやハるさ
うこえんいくくしきてやえねまつ
みくわえ
かしこうーナハかもこと食ハ
ものへなんかそかるときハなくわき
つをこうひいこそわしまくるしまひ行か
ちばわそれのきるえと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さて、せめて、
さもこそいなさこゝろいたけれ
さしうへ、ゆるまつもわもせず
かくまとゝ、
たゞとをゆ。まんもこそあれたまれる
こえてはうゝなのやうなるまく
やしあるあやしなてしとおとし思ひぶき
あゝほどしよゆる
ゆくうせよたをても物をれりよれ
大うゝ乃みゝ乃ちつちるみく
すてゝやり出るにきこゆるき人ハきゝ乃

トヤ二十二

しとをたゝてゝ（十二）なんとゝとでしてゝ到てはたい
ゆるるえるゝよたゆ手ゆるゆちかくゝるいれ（一葉附）
うゝといひてて
ワうれりよ人ゝゆなてハえなせやを
ワけきのえゝしよゆまゆゆる
みゝどゝいゝ（あるゝとゝ）ゝゝうゝあるゝとゝなく
てゝちゝゝゆきゝゝひ行ゝゝゆゝるをゆ
人ゝたいゝちゝ氏をゝゝれてゝおゝとゝゆよ
ものゝとくゝきゝゝゝゝゝゝゝるほゝゝよく
れゝゝるゝひゝよハなゝちゝゆきゝゝあゝてゝのゝの
ゝゝちゝゝゆうせたくゝゝよゝゆをゝゝゝてゝな

くくよりこひきこしよりこのかたをもわるしまいしうるとまるとくるにもも
いのちきはらるとおれはわをてはとて
まをるほかしくてなんだらうさのて
はやさいまいるとよりまよりなりまし

以下七段人継てりるるあし
佛名八わしとよ書うるなわとれい
さしのこちよつをとあはよはる實八
ちくうれ給ひてのちひらうあうとて十月

十五日ほとはとてきこにはやはるはうあし
かよ

かををるこはもきうもいはやそや
わしたちはをうをまつをん
四文八浄祓乃日よりかはりやはは
うて

凡祓乃ましかのうをひはうそまわ
いまいくちよはきをひうもの
世八祓八月八記あるちうんよかわ
流をしをるとはしはは后文うをを
給へうをるほくまくんしてはは

やし春かへし給かてしてよ
袖乃いろかたしる春をたにほて
こはしよたてを乃へ乃まつ
なかいし乃かんの乃くわまのもころりもいつ
いをゝゝとゝきこえぬ也給ふらはれ
なきぬよわぬもころもしをしき
ゝ乃ハもしほ乃火れしあとゝ祢ハ
乃ちゝゝをかしうをるもころくを
ものよかきてかりてのぼわて乃也給ふれて
乃ちゝくのらゝ乃ふ乃ふてえまゝハ
いゝよ乃ゝしゝ乃れゝしゝ乃ふ

六帖第二岡
みちのくのつゝ乃ふまんゝまつら
つゝしゝと味をゝゝゝゝゝゝ

わゝゝ人かをゝ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ
ふよれをゝ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ
いひれをせゝゝわをゝるゝ人よゝゝわゝ
ゝをゝ乃ゝゝをゝ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ
ゝゝ乃ふ乃ふ

ぬうくさ　あさちう　やまとしいたいたいたいの　ふるきをもとめ　ふるきをもとめ　よろたよをよろこぶ　きこうたうの　やまとうやへむ　をきるま

（八月のこ称のことばり　花しるのおほくくうてらくそうの日のまや神文のいまひその花）

（貫之家集　ちうやうやうなりしとしの人の　うらむへしやそ）

（後拾遺雑二　和泉式部　ものとしらぬ人の家を　ものとしらぬ人のもとへ　ものとしらぬ人のもとへ）

詞花雑上　をとこ　ちかうまてはさらしら　ひとへ　ちかうまてはさらしら　ひとへ　ちかうまてはさらしら　ひとへ

て

きの[illegible]かく作りゝ侍れたる恵ハ
ちゝもちなきうこうしなるあれん
さひしくのかへつるとしなりしきれへ時をう
さとにちりて
やまひちるをわれつるをといふたしたて
ちゝちなりけきよかへさるあれん
なとかへつるものせさわきをれし
さかよのいるなりんをみさるも
さりくるはの名るるきしきを

又

[illegible]

[illegible]てなをとゝ[illegible]えなきはるた
きしよわれなるるもかれきゝ

かへし

とゝよしのきにれわとはちりなわ
たまんたましハきゝうまよゝ

ゝ孤子しの名淡の佐よわて佐をしとき
給のてしわ拘よ地れ匂きるほのとかる
をし

かしてきぬちわさよきをきのを
なもくえくさ乃山乃ひなき

やへし

ゝ色ゝ花山のさくふまうせてん
ゝまんとあしは花のまん

かしこきあまのをぶねをしたひ
ちをしわとしたれ人のきてちく
かへりてとしをとわやうちうせいをて
きてまろこをけよさして
うちそらきこりえよまつこをけ
まろハ人をけみをとしなをち
ろひさまひて
うせをはあをのをもちをハしを
かりひしをはやまつをうなん
かへし
えつせうをはをたちわさきをうをうえハ

七月七日
中をみをうをけさをくいをつゆをも
えををすをきをしきをえをてをこなん
これハあしをさん
ををよをわあをしをれをてををなをる
ををををををるをものをなをくをさをあをよをん
にをうをををかへ中納言家

とゝとゝ[illegible]ひ[illegible]
びてゝゝゝゝまへ[illegible]てゝ

てゝ

かけて[illegible]しても[illegible]草
みゝゝゝ[illegible]
院ハまゝゝゝゝゝゝ
こゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬきたるかへつるものよ
ねまたくこしきんたちハもわれよ
まいきこえ人をとをとかもたてうたん
中ねのわれよりへとをとりわ給よかしてまつ
ぬぎわきれて
たちをまれうきしびせたこ風よにも
やかをねたぬとゆををかしてをる
かへし
たちをたもをたもをなねよとこれをしむすひう
高ハんををきをうくきしね
われ半のををかへを給をて

トノトニ十カ

花をきまゆきもやまねをとよ
くりうきさわをくわたるかれて
二雅寺の普門品千部の経供養
をるよちハしてかへを給よれのやのくを
いとしれたしかうちきれぐ涙まもきに
てかへを給よ
拾遺
ぬきくこるとはきのよ月をは
いさとのくえををうくまうさん
こはうへのうまりけりりきしれほくてきつう
祇の行わりをとりて院をめてまうんを
きうかをのをのいをんをを接政のくちわ
脩

うしきうへつかたにはやまみち
ちかしもをよせちかへにはやまみち
こゝにこゝろよつるさとにはれもをんなれ
傍のところよ山里よなうわ平る女わらほと
やしきゝ次たゝうゝ
えこいと行てまつちやにたゝき次
寛和二年内裏歌合
いよそ山へをなきてをくぞわる
こゝろ分ハ寛和二年歌合よあわ法作冊
よゝつゝ
拾雑下
るゝつ海ハうすれ舟こそわつときし
のつゝ
トノト三ヤ
しのうれ給てたちつゝよ人あへてきて
え給しきしだ
上巻
いゝらハいろなるこまつくるき
ときあわなうさとのうれかしえを
うしわかよう乃たゝ
うの花のさうなるへ山さと乃
衣もちほをるれつとえゆれて
ほゝき次
ほゝき次ほゝき次ほゝきる色とう
もうれなるよ人やいふ
あやち

[illegible]

孫をきたりてこきうしたれ

ほうる

さくらんやとてはいきやとてはいと

かもてるまもてらてはる

やしこなつ

さきまるえるさうせんぴこなつ

のやけき名をやのさきさまし

かるわ

あやなうやとれやわ火けかて

るもしーりこをさけはる

せし

わたるとはせもれるこをきりたち

いまろくれむりわきをとりわる

草

こよたるんやさるとまるほて

きけてのまはあのなんくら

こい

かのひけくこひけくハ祈わする

ゆめとさめてはくこしりもも

いとひ

後撰

[illegible]

ちきれ

うろ覚ねゝこゝろ〳〵ハなのまにいやけれ

賀乃家ハ月記よりれハかくと

右蜻蛉日記壹部三冊者右大将道綱母之作也
元禄九年四月十四日以水戸中納言卿御本一校了

蜻蛉日記下之下終

密乗沙門契沖

寶暦六子十二月

大坂齋橋淺路町角

安井嘉兵衛再板